

「デジタル・アーカイブへの期待」



石井 米雄
人間文化研究機構

すでに30年も昔の話になるが、民博に大型コンピュータが導入されてまもない頃、コンピュータ専門家の協力を得て、タイ語古代法典『三印法典』のKWIC総辞索引を作成したことがある。たしか各巻500ページで70巻を超える膨大な成果を、全世界のタイ研究機関に送付してコメントをもとめた。その結果は、言語学者からは好評を得たが、歴史学者からは使いにくいという意見が寄せられた。その後改善策を模索していたところ、たまたまドイツの某聖書研究所が作成したギリシャ語新約聖書のコンピュータ・インデックスを入手、これを参考にして、KWICとは異なり、所要の単語を含む各文章の全文を検索できるシステムを開発しバンコクで出版して好評を得た。

その時以来、コンピュータ専門家にはお世話になりつづけて現在に至っている。2001年、国立公文書館に設置された「アジア歴史資料センター」のセンター長に就任した。「アジア歴史資料センター」は、国立公文書館、外務省外交史料館、防衛庁防衛研修所図書館所蔵のアジアに関する公文書を、デジタル画像化して、これを全世界に発信する事業を目的として設置された機関である。現在740万画像のデジタル化が終了し、インターネット上での検索利用が可能となっている。第一段階での目標は、2800万画像のデジタル化である。センターは発足以来現在までに80万以上のアクセスがあり、主としてアジアの現代史研究者に広く利用されている。

「アジア歴史資料センター」での3年間の経験から、別個の機関の所蔵する資料を画像として利用可能とすることによって、研究者にどれほどおおきな利便を享受できるかという事実を確認し、この事業の意義を痛感している。本年4月発足した「大学共同利用機関人間文化研究機構」には、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館の5機関が所属している。目下の目標は、これらの5機

関の所蔵している膨大な文献資料の共有化事業である。「アジア歴史資料センター」の場合と違い、各機関が、それぞれのシステムにしたがって構築したデジタル化された文献資源を共有化できる総合的システムをいかにして構築するか。困難だがやりがいがあり、またやらなければならない課題と考えている。

略歴

1929年：東京生まれ。

1965年—1990年：京都大学東南アジア研究センター

助教授、教授、所長を歴任。

1990年—1997年：上智大学教授。

1997年—2004年：神田外語大学学長。

現在：大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長。

京大法博、京都大学名誉教授。文化功労者。

主な著作

1. 「上座部仏教の政治社会学—国教の構造」 (創文社 1975)
2. 「インドシナ文明の世界」 (講談社 1977)
3. 「The Junk Trade from Southeast Asia:
Translations from Tosen-Fusetugaki」
(Singapore: ISEAS 1998)
4. 「タイ近世史研究序説」 (岩波書店 1999)
5. 「メコン」 (株式会社めこん 1995)